月刊
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成19年1月1日発行　第31巻第1号通巻第352号

みんぱく

国立民族学博物館
2007
1

特集　イノシシとブタ

エッセイ

世界へ 世界から

形として残す

秋篠宮文仁

私たちの身近にいる「生き物」の研究について、よく聞く話がある。生物学を専攻し、そのために数多くの標本を大学に所持している研究者がいても、その人が退職すると標本は捨て去られてしまうという。まさか全ての大学で同様のことが現在も起こっているとは思えないが、少なくとも過去においては当たらずとも遠からずといったところだろうか。科学振興に力を入れている国とは思えないほど、生き物を「形」として残してこなかったといえよう。

ところで、私自身、欧州の自然史系博物館に通っていたことがあるが、その時に得た印象は、該当する標本をかなり高い確率で見つけることができたということである。これは、それぞれの国で学者や収集家が集めた品を、博物館や大学がリファレンスとして使えるよう現在まで残しておいてくれたからに他ならない。そのことは、標本を資料として残すこと自体に大切な意味があることを教えてくれている。

これを私の関心事である家畜誌に当てはめてみよう。家畜誌の世界においてもゲノムなどの分子研究分野が流行っているが、被採取個体が残っていなければ再現性もないし追試もできない。逆に、生体・遺体に関わらず、属性がはっきりとした形で生き物自体が残っていれば、そこからの科学としての発展は大いに期待できるといえる。じつのところ、家畜誌、なかでも家禽（かきん）とその成立背景に興味を抱いている私にとっては、文化や地理的隔離による羽色や骨格などの姿形の異なりを調べたいのだが、参考にできるほどの情報が日本にはきわめて少なく、困ることが多々ある。したがって、日本が家畜誌研究に資する資料を残しているかというと否といわざるを得ない。

しかし幸いにも近年、我が国においても生き物自体を保存していこうという傾向が徐々に増してきている。私の関係している動物園や水族館においても、動物が死亡したときに何らかの形で保存することが多くなってきた。ある博物館では小学生から大人までがサークルをつくり、動物園等で死亡した動物の骨格標本作製をしているとの話を聞いた。遺体科学の面白さと標本資料の重要性について書かれた書籍も立て続けに出版されている。

このような動きは、現在の日本では到底主流とはいえないが、まずは個人単位そして組織単位で行動を起こしていく必要がありそうだ。無意味な殺生をするべきでないことはもちろんだが、死亡してしまった生き物を形として残すことは、さまざまな面から考えて、我が国の生物学ひいては博物学に必ずや資するものとなることだろう。最近よくいわれる「もったいない」をさらにポジティブに、学術発展のために「形として残す」思想が普及することを願っている。

あきしののみや ふみひと／1965年生まれ。（社）日本動物園水族館協会総裁、（財）山階鳥類研究所総裁ほか。専攻は生き物文化誌。理学博士。著書に『鶏と人―民族生物学の視点から』（小学館）『欧州家禽図鑑』共著（平凡社）などがある。

月刊みんぱく

目次

JANUARY 2007 月刊みんぱく 1

01 エッセイ 世界へ世界から
形として残す
秋篠宮文仁

02 特集 イノシシとブタ
人間くさい動物
―イノシシとブタ―
野林 厚志

イノシシがブタに変わるとき
―小さな骨からひもとく歴史の事実―
本郷 一美

イノシシと人間の共生
高橋 春成

おいらは猪八戒（ちょはっかい）、
イノシシよりは偉いのだ
磯部 彰

08 未来へひらくミュージアム
参加体験型の感動を提案
―市民とともにある九州国立博物館―
墓信 祐爾

11 表紙モノ語り
マタンサ デ ポルコ
野林 厚志

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
「赤」と「緑」と「森の人びと」
名和 克郎

15 時論・新論・理想論
知られざる来館者の行動
佐々木 亨

16 外国人として生きる
インドネシアと日本をつなぐ人
浜元 聡子

18 地球を集める
アフリカン・ビーズの
展示に込められたもの
池谷 和信

20 生きもの博物誌
サルに小馬鹿にされる日本人
伊澤 紘生

22 フィールドで考える
都市の「地層」を読む
木村 周平

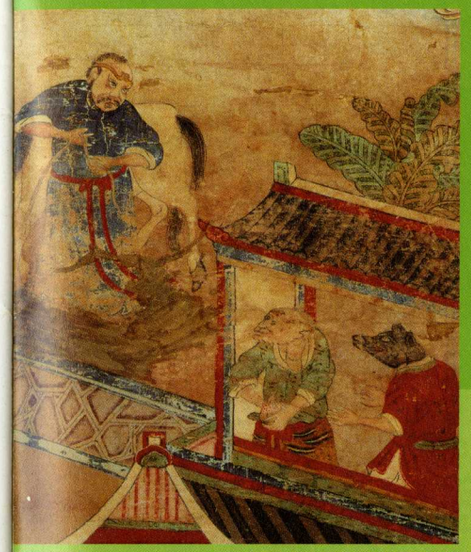
24 2006年度年末年始展示イベント
「いのしし」
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ

特集 イノシシとブタ

今年の干支はイノシシである。中国などではイノシシの代わりに、ブタが干支の動物となっている。イノシシとブタは原種と家畜との関係であり、古来、イノシシと人間、ブタと人間はさまざまな関係を育んできた。特集では考古学、生物地理学、中国文学の分野から、その関係について検証してみたい。

生け捕りにされた後、飼育されているイノシシ（台湾）



清代『西遊記図巻』に描かれる猪八戒

明代猪八戒像（東北大学所蔵）

トルコのギョベクリ・テペ遺跡

獣道を駆けるイノシシ

人間くさい動物
—イノシシとブタ—

野林 厚志
（のばやし あつし）
本館文化資源研究センター

今年は十二支の最後をしめくくるイノシシの年である。イノシシに与えられた一般的なイメージは猪突猛進のことばでいいあらわされるように、勢いのある、まっすぐな、思い込みの激しい（？）動物だというものであろう。あるいは、ウリ坊（イノシシの子）の姿かたちから思い浮かぶのはユーモラスな可愛い動物の様子かもしれない。あまり知られていないのだが、じつはイノシシはとてもデリケートな動物だといわれている。環境の変化を敏感に感じとる能力は他の動物に勝るとも劣らない。森林の伐採や地震の影響で、イノシシの群れがもともといた場所からすっかり姿を消してしまったという話は時折耳にする。また、幼少のころの死亡率はとても高く、一歳になるまでに半数あまりのウリ坊は死んでしまう。人間側が抱いているほど、イノシシはがさつで暢気な動物ではなさそうである。

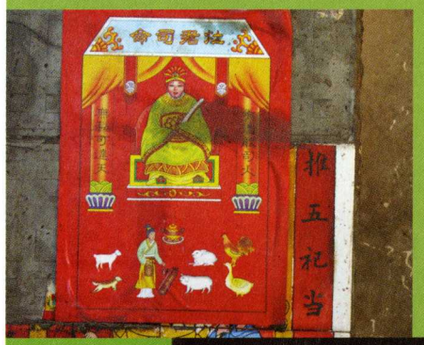
害獣としてのイノシシ

一方で、農業にたずさわる人びとにとっては、イノシシはあまりありがたくない動物だろう。日本ではむかしから畑を荒らす害獣の代表格がほかならぬイノシシだからだ。各地に残るシシ垣は人間とイノシシとの攻防史をものがたる遺跡に他ならない。最近では電気の通じたシシ囲いも用いられて、なんとか農作物をイノシシから守ろうとする工夫がなされている。逆にこうしたことを利用したイノシシ狩猟の方法があったりする。筆者が調査している台湾原住民族のパイワンの人びとには、サツマイモ畑に寄ってくるイノシシを待ち伏せして仕留めるパラオンとよばれる狩猟法が伝えられてきた。シシ垣が人間とイノシシとの知恵比べであれば、待ち伏せにひっかかってしまうかどうかもまた人間とイノシシとの知恵比べなのだろう。そんな彼らに、日本では、今では街中にまでイノシシがやって来るのだという話をすると、何故、日本の人たちはイノシシを捕まえないのかと不思議がられた。政府によって山間部での狩猟がひどく制限されている彼らにとって、あちらさんから街中にでてきてくれるのだから狩猟には好都合だというのである。

生まれ年は、ブタ年

ところで、台湾の原住民族の人たち

チベット系の家畜ブタ



かまどの神様をまつるお札
（中国・福建省）

中国では
干支の最後は
ブタがつとめる

にはもともと十二支という動物の役回りといった考え方はなかった。現在では台湾の多数派をしめる漢族系の人びとの習慣に影響されて、十二支を受け入れている。そして、来年の干支はイノシシではなくブタというのが彼らの一般常識なのである。いうまでもなく、中国における干支の動物はイノシシではなくブタであり、来年はブタ年となる。「自分の生まれ年はブタ年です」といういい方は、日本のイノシシ年といういい方に慣れた我々はどことなく違和感を覚えてしまうだろう。日本でなぜ十二支の最後のしめくくりがブタからイノシシになったのかについては諸説あるが、イノシシを十二支の動物に加えているのは日本くらいであることは確かだ。

人間がみずからの姿を投影

このイノシシとブタの関係にはよくよく考えてみると、他の動物にはない特徴的な面がいくつか見受けられる。イノブタという名前を聞いたことのある読者の方は少なくないだろう。イノシシとブタから生まれた雑種の第一代のことだが、このイノブタは子孫を増やすことができる。すなわち、イノシシとブタは生物学的には同種だということになる。そして、現在、品種改良を重ねられ、さまざまな姿かたちに変わっていったブタの祖先種（野生種）は基本的には現存するイノシシであると考えられている。これは、ヒツジ、ヤギ、ウシ、イヌやラクダ科の家畜の祖先種が現存していないことに比べると、かなりユニークな家畜化の過程をたどった動物であると言える。野生であるときの人間とのかかわり方と家畜になってからの人間とのかかわり方を同時代的に見せてくれる動物種のひとつであり、家畜化の過程を生物学的な側面からだけではなく、文化的な側面からもたどっていく可能性を与えてくれる動物がイノシシでありブタなのである。イノシシとブタと人間は、じつは家畜化によってブタが誕生して以来、共存してきた仲なのである。こんな関係は他の十二支の動物とのあいだには見当たらないのではないだろうか。

害獣として敬遠される反面、どことなくユーモラスな風貌から決して憎みきれないイノシシ。宗教上の理由で食することを禁じられた地域があると思えば、財産の象徴として崇められることもあるブタ。色々な意味づけを人間によって与えられてきたイノシシとブタは、人間にとても身近な存在であり続けてきた動物である。もしかすると、人間は自分たちの姿をイノシシやブタに投影してきたのかもしれない。

イノシシをとらえたパイワン族のハンター（台湾）

ブタ肉は中国では欠かすことのできない食材（中国・福建省）

ブタの内臓を酒とショウガで炒めた、福建省客家の名物料理

特集 イノシシとブタ

イノシシがブタに変わるとき
―小さな骨からひもとく歴史の事実―

本郷 一美
（ほんごう ひとみ）
総合研究大学院大学助教授

緩やかにブタへ変化

イノシシは、ユーラシア大陸の中緯度地域ほぼ全域に分布する。ブタには大きく西洋種と東洋種の二グループがあり、それぞれ西アジアと東アジアで別々にイノシシから家畜化された。西洋ブタの祖先は「肥沃な三日月弧」―現在のイラン西部、トルコ南東部、シリア北部にかけての地域―で家畜化された。この地域では、まず約九五〇〇年前にヤギの飼育が始まり、ウシとブタの家畜化はそれより一〇〇〇年以上遅いとされていたが、最近の研究により、イノシシの家畜化もヤギと同じくらい古い可能性が出てきた。

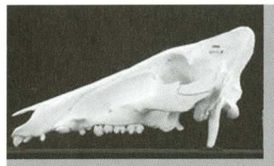
イノシシの家畜化過程は、先史時代の遺跡から出土する骨をもとに探ることができる。イノシシとブタの骨のもっとも顕著な違いは、大きさと頭蓋骨のかたちである。ブタはイノシシより小型で足が短い。鼻で土を掘り返すことが少なく、柔らかい物を食べるブタは、イノシシより鼻面と顎が未発達になる。横から見ると、イノシシは額から鼻まで直線的で長いが、ブタでは丸みを帯びる（写真1・2）。さらに顔面が短くなった現代のブタは鼻面が凹んでいる。ブタは顎が短くなったため歯も小型化し、曲がって生えることもある。しかし、家畜化初期のブタを形態的にイノシシと区別する事は難しい。品種改良が進んでいないブタは、鼻面は直線的で、色が黒く、体毛が多く、外見は小さなイノシシのようである（写真3）。

トルコ南東部のチグリス川とユーフラテス川の上流域は、イノシシが家畜化された場所のひとつと考えられる。タウルス山脈から流れ出る中小の河川がふたつの大河に注ぎ、新石器時代は湿地、森林、ステップなどの多様な環境が入り混じる豊かな土地であった。この地域では、イノシシに特別な象徴的意味が付与されていたらしい。ウルファ近郊のギョベクリ・テペ（約一万一〇〇〇年前）は、農耕開始以前の祭祀遺跡で、六メートルもの高さのT字型の石柱がストーンヘンジのように円形に配されている。石柱のなかにはイノシシの浮き彫りが施されたものがあり、イノシシの石像も出土している（写真4）。

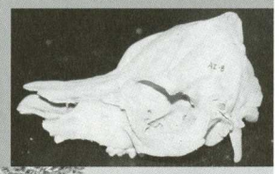
チグリス川支流沿いにあるチャヨヌ遺跡は、一万年前ごろから営まれた新石器時代の遺跡で、出土する動物骨の半分近くをイノシシが占める。この遺跡で、集落周辺の畑や川沿いの湿地に寄ってくる野生イノシシを積極的に狩猟しつつ、少数の個体を飼育するようになった過程を追うことができる。約九〇〇〇年前ごろからイノシシの骨のなかに、野生のものより小型のものが混じるようになる。小型個体は徐々に増加し、約八〇〇〇年前以降は明らかに大型（野生）と小型（家畜）の二グループが存在する。おそらく、子どものイノシシを拾って育てたのが初まりではないだろうか。イノシシからブタへの変化は緩やかなもので、両者の交雑も頻繁にあったと考えられる。

イヌの次に古いつきあい

イノシシと人の関係が深まったのは少なくとも一万年前にさかのぼるとの議論もある。もともとイノシシが分布しないキプロス島など地中海の島々の遺跡で、新石器文化の伝播とともに、イノシシの骨が出土し始めるのである。人の手で島に運ばれたもので、イノシシの飼育が始まっていた証拠とする研究者もいる。しかし島で出土するイノシシの形態やサイズは野生のものと区別できない。西アジア本土で家畜化がすすむ以前であること、キツネやシカなども島へ運ばれており、野生動物を生け捕りにして島に放すのは古今東西のハンターに見られる行為であることから、飼育されていたとは限らないとの意見もある。日本でも地中海の島々と似た状況があり、ブタの飼育が始まる以前の縄文時代に、もともとイノシシが生息しない北海道や伊豆諸島の遺跡からイノシシが出土する。イノシシは、イヌに次いで古くから人とつきあってきた動物なのである。



（写真1）ニホンイノシシの頭蓋骨
《獨協医科大学ほ乳類頭蓋画像データベース〈第2版〉》
http://macro.dokkyomed.ac.jp/mammal/jp/mammal.html



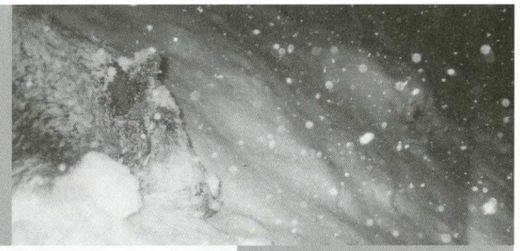
（写真2）
東南アジアの家畜。ブタの頭蓋骨

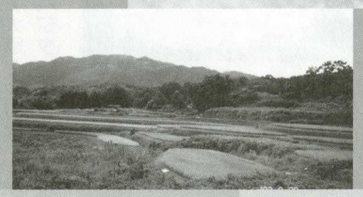
（写真3）
ベトナム南部の在来種のブタ

（写真4）トルコのギョベクリ・テペ遺跡のイノシシ浮き彫り

特集 イノシシとブタ

（写真2）水田近くに置かれた駆除用のオリで捕獲されたイノシシ





（写真4）雪のなか、獣道をラッセルするイノシシ。イノシシによって除雪された獣道を他の動物が利用する。これも生態系のなかで果たすイノシシの役割だ

（写真3）耕作放棄地に囲まれた水田はイノシシの標的になる

（写真1）各地に残るシシ垣のなかには、長さが10キロメートル以上のものもある

イノシシと人間の共生

高橋 春成
（たかはし しゅんじょう）
奈良大学教授

シシ垣を築いた時代

イノシシは、いわゆる山深いところにいる動物ではない。多くは里山といわれるような低山部に生息してきた。里山の人びとはイノシシの攻防を物語るものとして、各地にシシ垣が残っている（写真1）。これは、イノシシやシカなどが田畑に侵入してこないように築かれた垣で、江戸時代などに築かれた石積みや土盛りの遺構が山麓や山間に見られる。人間の居住地域と重なり合うイノシシの侵入を阻止するには、このようなシシ垣は有効な手段であったし、それによって人間とイノシシの棲みわけが成立していた。もちろん、シシ垣によってイノシシやシカの侵入が完全に阻止できたわけではなく、人びとはシシ垣の修復や点検、突破して侵入したイノシシやシカに対応する必要があった。

里中に侵入するイノシシ

ところが近年、人間とイノシシの棲みわけは壊れ、それに伴ってイノシシが里中に侵入している。そしてイネを中心とした農業被害が深刻化している（写真2）。里中へのイノシシの侵入が最初に問題となったのは、高度経済成長期のころである。この時期、山間や山麓の農村部から都市部への人口流出が目立ち、いわゆる過疎化のなかで、利用集約度の低下した里山や放棄された耕作地が各所で見られるようになった。里中や里山の荒廃は、米の生産調整、高齢化、兼業化のなかで今も進行している（写真3）。

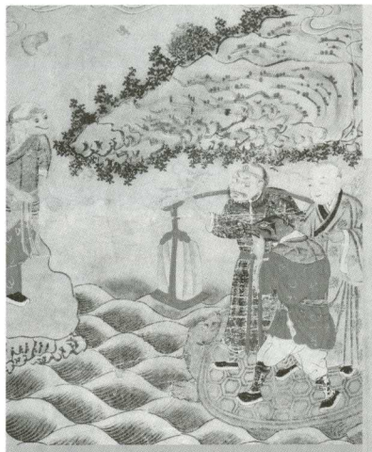
このような状況はイノシシにとって好都合であった。水田の耕作放棄地にはススキ、ササ、クズなどが侵入し、イノシシに食料、水、潜伏場所、移動経路を提供した。イノシシはツキノワグマやカモシカなどと違って、もともと集落周辺の里山に棲む動物である。それゆえに、里中やその周辺に里山的な生息環境ができると、そこにひきつけられる。

共生へのあらたな視座

拡大するイノシシ被害のなかでイノシシに対する"害獣視"は高まる一方であるが、"生物多様性"がキーワードとなっている今日、わたしたちはイノシシとも共存する道を求めなければならない。被害地では心情的に抵抗があるだろうが、まず、わたしたちはイノシシを"地域の財産"と見なさなければならない。なぜかというと、地域の生物多様性の構成員だからである（写真4）。近年のイノシシの里中への侵入の背景には、社会経済情勢の変化がある。メダカやホタルといった少なくなった生き物を復活させようと生息環境を整えるとり組みが各地でおこなわれているのと同じように、わたしたちはイノシシの生息環境を整えるとり組みを各地でおこなう必要がある。これまでは、イノシシとのかかわりといえば"狩猟"と"被害防除"がキーワードであったが、イノシシとの共生にあらたな視座を盛り込む時代がきている。

おいらは猪八戒（ちょはっかい）、イノシシよりは偉いのだ

磯部 彰
（いそべ あきら）
東北大学教授



清代『西遊記図巻』の猪八戒。耳が小さく顔はつき出ていてまるでイノシシのようである

イノシシに乗る摩利支天像。『図像抄』巻9摩利支天菩薩（称名寺蔵神奈川県立金沢文庫保管）

明代木彫摩利支天像。後頭部にブタの顔が添えられる

昨年は馬琴大人は大活躍だったが、今年はおいら猪八戒の歳、『西遊記』の年だ。『八犬伝』ごくろうさん。おや、サルの奴、まだいるよ！困ったものだ、物忘れが激しくて申歳でもないのに、老猪さまについて来て。

下界での神様の姿

『西遊記』でいちばんの人気者は、意外にも孫悟空ではなく、欠点だらけの猪八戒。二〇〇七年の干支は「猪」で、日本人は「猪」を「イノシシ」と思っているが、中国では「ブタ」さんに当たる。だから、猪八戒とは、ブタ八戒さんということになる。

三蔵法師の取経ものがたりに猪八戒が登場するのは、元朝時代にあった「西遊記」物語であるらしく、朝鮮朝時代に再編集された『朴通事諺解（ぼくつうじげんかい）』に朱八戒という名前が留められる。元に代わって天下を取った明王朝になると、皇帝の姓が朱氏であったためか、八戒も同姓を遠慮して、朱姓を同じ発音の猪姓に改めたらしい。

では、猪八戒なるスターは、どこからやって来て、三蔵法師の弟子となったのか。これを解くヒントは、明の初めにあった『楊東来先生批評西游記（ようとうらいせんせいひひょうさいゆうき）』という芝居の台本にある。そのなかで、猪八戒が自分の素性を言う場面がある。自分は元々摩里支天菩薩の御車将軍だと言う。今の猪八戒は天蓬元帥（てんぽうげんすい）となっているが、元々は摩里支天という仏様の御車将軍だと言う。ところが、中国でのお役人の役目を見ると、御車将軍とかいう官職はない。じつは、これは摩里支天菩薩が乗っているブタのタクシーからとってきたブタの作り話らしい。

ブタといっても、ちょっとした、そんじょそこらのブタではない。猪八戒は自分の身分を語らって、つまり摩里支天様のお乗りになる御車護衛の将軍様であった、と言う。密教系仏画では摩里支天菩薩は月を背にするイノシシに乗っている。そこで御車将軍だ、とその出自を誇示したのである。

密教で信仰される摩里支天は顔が三面、正面が普通の女性の顔をし、もうひとつは菩薩の顔、もうひとつはブタの顔をしている。元の時代は、唐代に盛んであった中国密教は既にすたれていたので、猪八戒には、モンゴル人がもち込んだチベット密教のマリチー（摩里支天）が率いたブタ一家の影響もあるらしい。

初期の猪八戒像は仏教世界のお湯にどっぷりとつかっていたが、もちろん、それだけで今日の猪八戒像ができているのではない。三蔵法師の物語が発展し、明後期の完成版では、猪八戒は、例えば天蓬元帥という元帥のなれの果てだといわれる。天蓬元帥というのは、道教の護法神のひとつで、黒い顔をしている。猪八戒は、元代に黒ブタとして登場していたので、黒い顔をした神様が猪八戒のイメージの拡充とともに投入され、結果として、猪八戒は摩里支天の御車将軍から少し昇格し、天蓬元帥という位の高い道教系の神様が下界にあらわれた姿と表現される。

人間くさく親しみやすく

かつて、猪八戒が登場する以前、孫悟空は両面的な性格をもつサルで、取経の旅の前は悪い暴れザル、奥さんももっていたと表現されていた。ところが、三蔵に帰依するとまじめ一方のサルになる。そのまじめ一方のサルとして孫悟空を描いていくため、古い時代の「西遊記」でサルがもっていたやくざな部分を全部、猪八戒、つまりブタにくっつけた。猪八戒に、女好き、博打好き、怠け者、寝るのが好き、食うのが好き、といった人間のもつ弱みや性格がすべて押しつけられた。だから、猪八戒は三蔵法師の一行のなかでは、もっとも人間くさく、かつ親しみやすい〈イノシシ〉様になったのであろう。

未来へひらく
ミュージアム

参加体験型の感動を提案

―市民とともにある九州国立博物館―

九州国立博物館は
「市民とともにある博物館」をコンセプトに、
参加体験型展示室「あじっぱ」や
環境に配慮した最新施設など、
さまざまな試みに挑戦。
予想以上の来館者数を獲得した
その秘密に迫ってみたい。

墓信 祐爾（だいのぶ ゆうじ）
九州国立博物館　学芸部文化財課長

九州国立博物館の誕生「文化は西から、九州から」

当館は、国際社会におけるアジアの重要性が日々増大している今日、わが国の歴史と文化の成り立ちをアジア史的観点から考える機会を提供し、アジアを中心とする諸外国との相互理解を深めるために設立された四番目の国立博物館（二〇〇五年一〇月一六日福岡県太宰府市に開館）である。

「あじっぱ」外観。
カラフルな色使いでねぶた風に
「あじっぱ」と表示

韓国屋台。
お面、着物、凧、帽子、花瓶など
さまざまなものが置かれている

先行する三つの国立博物館の創立はすべて一九世紀末（一八七二年の東京国立博物館、一八九五年の奈良国立博物館、一八九七年の京都国立博物館）にさかのぼり、歴代の首都にある。朝鮮半島や中国大陸に近く、「遠の朝廷」とよばれた大宰府（現太宰府市）が置かれていた北部九州地方には、古くより大陸からの最新情報がもたらされ、国内各地へ伝えられた。そこから当館のキャッチフレーズ「文化は西から、九州から」が生まれたのである。

最後発の国立博物館として、ともすれば「来たい人、見たい人だけのもの」となりがちな従来型の博物館から、興味のない人にも来てもらい感動を共有できる博物館を目指すことが計画段階から求められてきた。そのために、エントランスロビーと一体化が可能な多目的なミュージアムホールの活用とともに、将来の来館者となることが期待される子どもたちへの仕掛けが重要な要素として認識された。その答えが「あじっぱ」である。

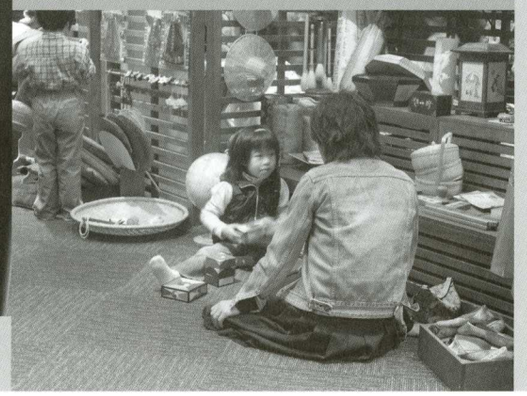
参加体験型展示室「あじっぱ」

博物館で展示されている作品につけられた日本語名称は漢字だらけで、読み方も含め専門的すぎて何のことかわからないと感じた経験はたいていの方にあるのではないだろうか。そのため、各地の博物館では、わかりやすい日本語名称を用いようとする動きがにわかに広まりつつある。しかし、そうした工夫を重ねたとしても、博物館来館者のうちある程度の割合を占めている小学生やさらに小さな子どもたちにはまだまだむずかしい。

そこで当館では、国立博物館としては初めて、常設の参加体験型展示室「あじっぱ」を、一階無料ゾーン・エントランスロビー奥に設けた。全面ガラス張りで鮮烈な色彩にみちたこのコーナーは、子どもたちが自由に遊べる「アジアの原っぱ」となることを祈って名づけられた。このコーナーにこそ、当館の目指す「市民とともにある博物館」という方向性がわかりやすくあらわれていると思われるので、ようやく開館一周年を迎えたばかりの九州国立博物館の紹介を「あじっぱ」からはじめよう。

「あじっぱ」の主役は、あまり博物館になじみのない子どもたちである。彼らにとって、声を出さずに、暗い展示室内で、ひびが入っていたり、全体に暗く、汚れているとしか思えないような古いものを、ケースのガラス越しに、静かに鑑賞することはたいへん辛いことに違いない。そしてそうしなければいけない博物館に行くことになんか、何の魅力も感じないだろう。どうすれば、博物館という場所が楽しいと感じてくれるだろうか、また行ってみたいと思ってくれるだろうか。そういったことを探るところから、このコーナーの構想は生まれた。そして、子どもたちが説明抜きに楽しめ、自由にやってみたいことを自由に選び、そして居たいだけ居てもいい場所として、この「あじっぱ」が生まれた。幸い、週末や学校の休みの時期を中心に、子どもたちが集まる人気のスポットとなった。

みんな座ってゲームをしようよ
（「あじっぱ」にて）



おかあさん、一緒に遊ぼうよ

「あじっぱ」には、わが国と長く関係を結んできた韓国・中国・インドネシア・タイ・ポルトガル・オランダの国々で使われている品々が飾られた屋台が並んでいる。それぞれの屋台には、当館担当学芸員が現地で買い込んできた食器、衣装、履物、文具、お面、おもちゃなど、日常生活で見かけるものを並べている。わが国の屋台に並んでいる同種の品物と、それぞれの文様、材料、色彩、技法などを比較観察することができる。おもちゃや楽器を自由に使って遊ぶことができ、もしわからないことがあったりゲームの相手が必要だったら、ボランティアの方々が対応してくれる。子どもたちは、おとなとの会話によって自らの体験をふくらますこともできるようになる。

その奥にある「あじぎゃら」は、ガラスで仕切られており、意識的に上の展示室に近い静かな空間となっている。壁つきケースやのぞきケースなどには、郷土人形や食器類、また最近大人気の古文書『針聞書』も展示されている。またここでは、ボランティアや館の職員に手伝ってもらいながら、壁にあるボックスキットに納められている実際

の作品を手にとって、観察、計測、記述したりしながら、学芸員の仕事を体験してみることもできる。ケースのなかにどう展示したらいいか、どういう照明や説明がふさわしいか、いろいろと試してみるのである。こうした体験から、作品の見方、壊れやすい作品の取扱方法、どこをどのように見せたいのかを子どもたち自身が考えたり工夫する力が育まれ、学校教育とは違う、博物館独特の学びが実践できるのである。

環境に配慮した大建築空間

二一世紀にふさわしい博物館建築として、最新技術・材料と木材の積極的な利用によって空間を構成すること、さらに環境に配慮した自然冷媒の採用や自然エネルギーの有効利用などが設備面での指針とされた。その結果、大きく波を打つチタン製で鮮やかな青色屋根と南北の大きなガラス面（計八〇〇〇平方メートル）をもつ印象的な大建築空間が生まれた。設計者は、江戸東京博物館、島根県立美術館など多くの公共建築物を手がけてこられ、二〇〇〇年に「今世紀を創った世界建築家一〇〇人」に選ばれた菊竹清訓氏である。

建物の大きさは八〇×一六〇メートル、最大高は三六メートル。延べ床面積は三万平方メートル。敷地は一六万平方メートルにおよぶ。紫外線を含まない大量の光が二重のガラス壁をとおして射し込み、全体を明るくしている。またガラス面には周囲の森や空が映り込み、巨大な建物がもつ圧迫感を消している。二重ガラス窓によって内部空間は外気温変化の影響や結露から無縁となった。

チタン製の屋根裏にはスギの間伐材が全部で4000本使われている

エントランスロビー。南と西側からさし込んでくる光と来館者のグループ

南側。大海原を思わせるゆるやかな曲線を描く屋根。広大なガラス面には森と空が映り込んでいる

太陽熱であたためた水をエントランスロビーの床暖房に用いたり、太陽光パネルで必要な電力の一パーセントを自家発電したり、雨水を処理してトイレ用水に使うなど、省エネルギーの考え方で建てられている。

建物西側にある一階エントランスロビーにはミュージアムホール、「あじっぱ」、ミュージアムショップとティーラウンジが、二階には収蔵庫、事務室、博物館科学関連諸室、修復アトリエ、トラックヤードなどが、三階には特別展示室（三室で合計一五〇〇平方メートル）、四階には文化交流展示室（中央展示室と一二の小部屋で、合計四〇〇〇平方メートル）が、そして五階には機械室が置かれるなど、各階ごとに機能が明確にわけられている。敷地はゆるやかに傾斜しており、二階から上の博物館機能部は、免震装置を介して風化花崗岩岩盤上に置かれ、阪神淡路大震災級の地震が来ても、来館者はもちろん、展示室・収蔵庫も守られるよう設計されている。事実開館前の二〇〇四年三月と四月に起こった福岡西方沖地震の際にもまったく被害がなかった。また収蔵庫内部全面にスギ材やブナ材が貼りつけられているところから、空調が止まっても庫内の温湿度はきわめて安定した状態で推移する。

展示について

これまで開催してきた特別展には、開館記念展「美の国　日本」「中国　美の十字路」「うるま　ちゅら島　琉球」「南の貝のものがたり」、開館一周年記念展「海の神々」そして現在開催中の「若冲と江戸絵画（三月一一日まで）」がある。さまざまな地域と分野を扱っていることに気がつかれるだろう。

文化交流展示室では、日本の歴史を、Ⅰ縄文人、海へ（旧石器時代・縄文時代）、Ⅱ稲づくりから国づくり（弥生時代・古墳時代）、Ⅲ遣唐使の時代（飛鳥・奈良・平安時代）、Ⅳアジアの海は日々これ交易（鎌倉・室町時代）、Ⅴ丸くなった地球、近づく西洋（江戸時代）に区切って陳列している。旧石器時代から一九世紀半ばの開国の時期までにあたる。自前の収蔵品資料はまだまだごく少数だが、国立三館や地方自治体所蔵の作品多数を借用しており、絵画・書跡・文書・工芸品などを中心に頻繁に展示替えを実施している。

一階無料ゾーンへの来館者総数は、開館後一年を迎えた二〇〇六年一〇月一六日現在で約二二〇万人を数え、特別展と文化交流展示の観覧者は累計約二四〇万人にのぼる。当初の予想来館者数を大幅に超えるこの数字を今後も維持することは不可能であるが、市民とともにある博物館として観覧者にとって快適な環境と展示を楽しんでいただけるような、さまざまな展覧会やイベントを企画していきたいと思っている。

表紙モノ語り

マタンサ デ ポルコ

人形（豚殺し）（標本番号H150749、高さ／15.0cm　幅／22.0cm　奥行／16.0cm）

野林 厚志（のばやし あつし）
本館文化資源研究センター

表紙の資料はポルトガルのポルト地方で作られている土製の人形である。ポルトガル語で「マタンサ デ ポルコ」と題されたこの人形は、ブタをほふる様子をあらわしたものであり、農村風景のひとコマを物語る資料となっている。ブタは、頭の先から尻尾の先まで余すところなく人間が利用できる動物である。とりわけ、秋のとば口にブタを殺して、塩漬けの肉、腸詰、燻製肉、ハムといったいろいろな保存食品を作り、長い冬に備える光景はヨーロッパの風物詩と言ってもよいだろう。なお民博のビデオテーク番組では、ドイツのソーセージ作りの様子を楽しむことができる（番組番号1218「ドイツのソーセージづくり」）。

ポルトガルに限らず、ヨーロッパにおいてブタは大切な家畜のひとつとなってきた。豊かな森林に恵まれたかつてのヨーロッパは、ブタの放牧に非常に適した地域であった。中世ヨーロッパの絵画には、しばしば森林のなかでどんぐりを餌としながら、放し飼いにされているブタの姿を見ることができる。森林は、どんぐりや木の実だけでなく、昆虫やミミズといった小動物、クズやタロイモといった根茎類等、ブタが好物とする食糧を与えてくれる絶好の住処（すみか）であった。農地や工業地、住宅地の開発によって森林は減少していき、やがて森林のブタ放牧はおこなわれなくなっていった。最近では、コルク樫の林で育てられるスペインのイベリコ豚が人気を呼んでいるが、これらはかつてのブタ放牧が再び評価されての現象とも言えるだろう。

ブタといえば畜舎飼育をすぐに思い浮かべてしまうが、ブタの祖先種は森林を自由に闊歩するイノシシである。緑深い森林はブタにとっても暮らしやすい環境なのである。

万国津々浦々

「赤」と「緑」と「森の人びと」

名和 克郎
（なわ かつお）
東京大学東洋文化研究所助教授

あらたな「森の人びと」

二〇〇四年三月、二年ぶりに訪れたネパールの首都カトマンドゥで、調査村出身の友人に新しいビャンシー語の語彙を教えてもらった。「森の人びと」「ジャングルの人びと」といった意味になるその語は、しかしヒマラヤ南麓の森のなかを移動しつつ生活していた採集狩猟民を指す語彙ではなかった。一九九六年に「人民戦争」を開始したマオイスト（ネパール共産党毛派）のゲリラたちを指すことばだったのである。

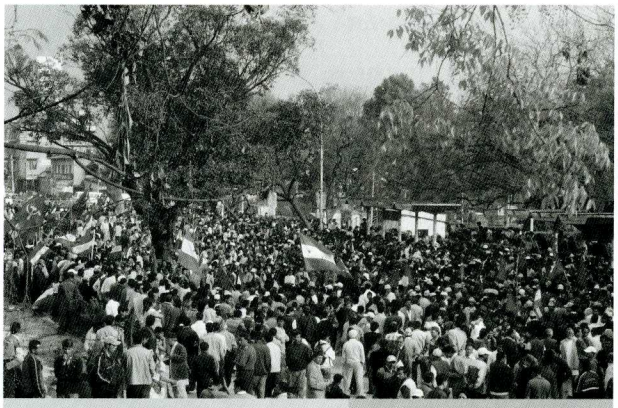
ネパールとインドの西側の国境の最北部一帯で話されているビャンシー語は、チベット・ビルマ語族に属するが、チベット語とも、ネパールで話されている他のチベット・ビルマ語族の言語とも大幅に異なり、周辺の幾つかの言語変種を除くと相互理解可能な言語は存在しない。このことから、ビャンシー語で話してさえいれば、外来者に会話の内容が筒抜けになってしまう気遣いはない、といえそうである。だが、事はそう簡単ではない。ビャンシー語にはネパール語やヒンディー語からのかなりの数の借用語が存在し、とりわけ政党名を含む近代的な制度や事物に関する語彙のほとんどが、そうした借用語で占められているからだ。武器をもったゲリラたちの目の前で、ビャンシー語を使ってゲリラや政治について語るのは、ゲリラ自身が少なくとも会話の主題を理解してしまう可能性が高いために、端的にいって危険な行為なのである。マオイストを指す隠語が生まれる所以である。

武器をもった外部者たち

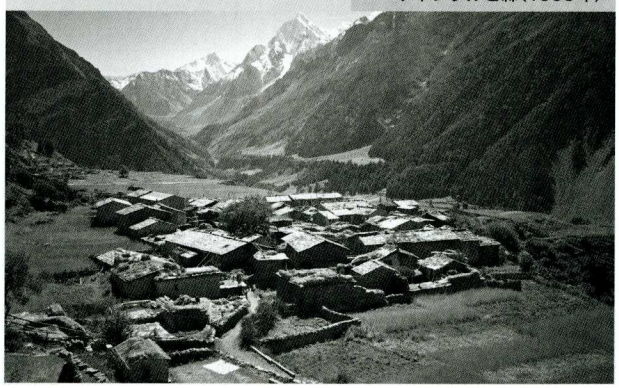
マオイストが村に来るようになる以前、類似の使われ方をしていたビャンシー語の語彙を、わたしはふたつ知っている。「赤」と「緑」である。ともにビャンシー語の基本的な色彩語彙なのだが、「おい、赤たちが来たぞ」「緑たちは行っちゃったよ」などと使われることがあった。「緑」は兵士のことで、これが彼らが身につける制服や迷彩服に由来することはすぐにわかる。他方「赤」の語は、日本語における用法とは大いに異なり、警察を意味する。これは警察官がかぶる赤っぽいベレー帽に由来しており、実際「赤帽」といわれることもあった。

緑、赤、森の三者は、村人にとって基本的に歓迎されざる存在である。確かに軍も警察も、少なくとも「人民戦争」がはじまる以前には、かなりの村人の目に魅力的な就職口と映っていた。だが日常生活で出会う兵士や警察官は、武器をもってやって来て、要らぬ詮索をしたり厄介事を起こしたりする存在とも見なされていた。この点で「緑」や「赤」は、「森の人びと」とさして変わらない訳だ。もちろん、マオイストが森から村にやって来るようになって、村人の実際の危険が大幅に増加したことは確実であるのだが。

なお、筆者が知る限り、現在刊行されているビャンシー語の語彙集等の情報からは、「森の人びと」という複合語を正確に再構成することはできないことを付言しておく。



ネパールの首都カトマンドゥでおこなわれた主要議会政党によるデモ（2004年3月）



ネパール、ビャンス地方の村チャングルと森（1993年）

時論
新論
理想論

知られざる来館者の行動

佐々木 亨
（ささき とおる）
北海道大学助教授
本館客員教員

行動追跡調査

ミュージアムの展示空間で、来館者はどんな行動をし、何を観て、どんなことを考え、経験しているのだろうか。

こういうことは、よく調べられているのだろうと思われがちである。しかし、じつはあまりよくわかっていない。というより、このようなことに関するデータを集め、分析することに、今までミュージアムはあまり関心を払ってこなかった。わたし自身もミュージアムに勤務していたころは、来館者の実態を具体的な数字やコメントとして積極的に集めることに、あまり熱心ではなかった。

平成一六年度に民博の客員教員になったのを機会に、来館者調査を始めた。昨年度は、常設展示場に来た観覧者一〇一組の行動追跡調査をおこなった。調査手順としては、はじめに調査員が展示場入口で調査内容を説明し、調査の了解をえた。次にデジカメをお渡しし、気に入った資料やコーナーを撮影するようにお願いをした。その後、展示場での行動を追跡した。追跡時間はおおよそ一時間半におよぶ。追跡しながら記録することは、展示場内での観覧動線、行動（立ち止まる・写真を撮影する・展示物に触れる・休憩する）、展示場の各エリア内での滞在時間である。観覧終了後には、デジカメで撮影した画像を見ながら、展示内容などに関する質問をおこなった。

「骸骨人形」（H131672他）は、今回の調査でもっとも多く撮影された展示資料

来館者は不安を抱え、そして疲れている？

この調査結果からさまざまなことがわかった。例えば、インタビューでは「観覧中に館内の広さが把握できない」「展示場の順路がわかりにくい」「休憩スペースやトイレの場所がわからない」という声が多かった。つまり、不安を抱えながら観ている方が少なくないということである。この課題を解消すれば、すぐに来館者の満足度に反映されるだろう。原因は現在分析中であるが、約半分の方がすべての展示ゾーンに足を踏み入れないまま帰ったこともわかった。

一方、来館者の疲労をどう解消するかという課題も見えてきた。順路どおりに観た場合、展示を三分の一ほど観た箇所に最初の休憩スペースがある。このスペースの前までは、展示エリアが進むたびに、単位面積あたりの観覧時間は減少している。休憩後は観覧時間が増えるが、三分の二ほど観た箇所にある次の休憩スペースはあまり利用されないので、出口のエリアに向かって観覧時間がどんどん減っていく。ほかの行動記録と併せてみると、展示場の後半では、来館者は立ち止まらずただ歩いている状態であることがわかった。

最近は、指定管理者制度や独立行政法人化など、ミュージアムの経営形態に関する話題が多い。経営形態がいかなるものになろうと、ミュージアムのミッション（使命）や目標が何であり、それらがどのくらい達成されているのかを、来館者や地域住民からのデータで、常にファクト（事実）として把握し、来館者実態を確認し、将来の改善につなげていく。こんな活動を自律的にミュージアムがおこなっていく必要があるとわたしは考えている。

外国人として生きる

インドネシアと日本をつなぐ人

浜元 聡子（はまもと さとこ）
京都大学東南アジア研究所研究員

日本人〈研究者〉の癒しの存在

おかっぱに切りそろえた黒髪をなびかせて、アグネスさんはいつも颯爽と、にこやかに登場する。ドロテア・アグネス・ランピセラさんは、インドネシア共和国南スラウェシ州マカッサル市から京都へやって来た。二〇〇六年九月から一年間の予定で、京都大学東南アジア研究所に外国人研究員として招聘された。今回の来日は、アグネスさんにとっては二〇年前に続いて、二度目の長期滞在となる。前回は、京都大学農学部の大学院生として五年間を過ごした。夫のルスリさんは、インドネシアで二人の子どもを育てながら、留守を預かった。今回の来日には、オランダの大学を卒業したばかりの長男デニくんと長女のリリィさんも同行している。一一月末には京都で銀婚式を迎えるために、ルスリさんも日本にやって来た。

二〇年ぶりの京都ではあるが、そのあいだアグネスさんは、インドネシアにいながらにして、日本との深いかかわりをもち続けてきた。アグネスさんの出身地、マカッサルは、一八世紀以降、オランダ東インド会社による香料交易の中継港として栄えた。一九四五年にインドネシア共和国が独立を果たし、それから六〇年余り。スラウェシ島と日本の関係は、ブラックタイガー、紅茶、コーヒー豆など、海と山から産出される農水産物の交易によって結ばれてきた。日本政府のODAやJICAによる経済開発や村落開発支援活動もまた、マカッサルの街を拠点として、スラウェシ島の各地で実施されてきた。

一方、一九五六年にマカッサルに設立された国立ハサヌディン大学は、共同調査研究や学術交流などで、日本からの研究者を数多く受け入れてきた。アグネスさんは、同大学農学部の講師として、日本の学術界とも活発にかかわってきた。類いまれなる日本語能力と、ボランティア精神に溢れる穏やかな人柄のアグネスさんは、ジャワ島でもなくバリ島でもない辺境の島におっかなびっくりやって来る日本人にとっては、まさに癒しそのものであった。と同時に、JICAやJOCV関連のプロジェクトでは、もち前の行動力を発揮して、日本語の通訳にとどまらず、住民参加型開発を実践する一員としても、活発な活動を展開してきた。

アグネスさんはルンバガ・プランギというNGOの設立者でもある。貧困村の子どもたちに地元で収穫される大豆から作る豆乳を飲ませて栄養状態を安定させたり、子どもたちが好きなときに本を読めるように村に図書館を建設したり、女性たちによるムスリム・ファッションの衣類縫製プログラムも走らせたり。何か立派でむずかしいことをしてあげるというのではなく、自分も現場で人びととかかわりつつ、楽しむことを大切だと考えている。そんなアグネスさんを慕って、多くの若い人びとが、スラウェシ島で開発学や地域研究の調査をおこなうようになってきた。

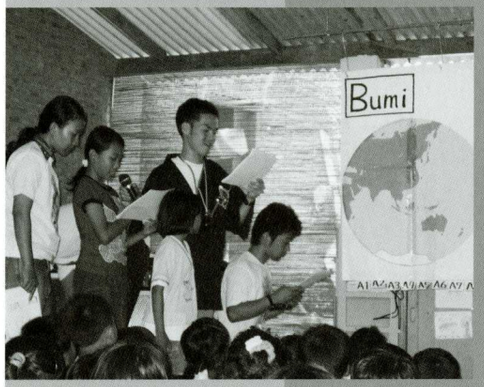
おもしろいが必須条件

初めてアグネスさんに出会ったのは、わたしが大学院修士課程の一回生だった一九九五年八月のこと。当時、インドネシア語も覚束ないどころか、自分が一体何を調査したいのかも、明確に説明することもできなかった。そこで紹介されたのが、アグネスさんだった。大学の先輩だということは聞かされていたとはいえ、アグネスさんは農学部で砂防工学の学位を修めたとのこと。話がまったくかみ合わないのではないかと、今となっては自分の了見の狭さを物語るような不要の心配をしていたのであった。

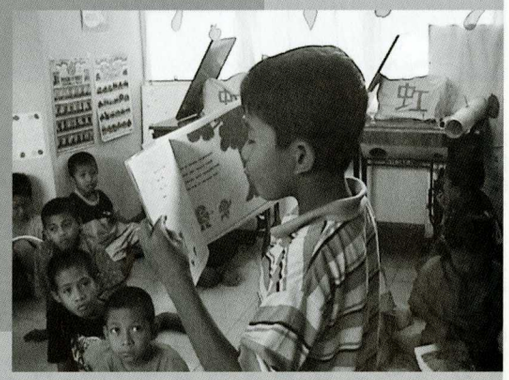
約束の場所にあらわれたアグネスさんは、驚くべき、じつにこなれた日本語を話す人だった。聡明ということばがこれほどふさわしい女性も、なかなかいないだろう。分野の違いを越えて、おもしろいものはおもしろいと評価でき、積極的に自分もかかわっていくフットワークの軽さを目の前で見せてくれる。フィールドワークということばだけはかろうじて知っていた当時のわたしに、どれほどの影響を与えてくれたかは見当もつかない。こんなことを調査したいと思っているとつたないインドネシア語混じりの日本語で話したところ、おもしろい！まずはやってみましょう！と、即座に反応してくれた。アグネスさんと話していると、ひんぱんに飛び出すことばが、この「おもしろい！」であることも、すぐにわかった。あれこれ考える前に、まず「おもしろい！」と、思ってみることが研究者としての必須条件、そう教えられたように思うのである。

二〇〇六年、インドネシアのジャワ島はふたつの大きな自然災害に見舞われた。五月に発生した中部ジャワ地震の被災地で、わたしは京都大学工学部の学生が中心となって主催する「京大防災教育の会（KIDS）」のメンバーと一緒に、子どもたちに防災教育を伝える活動をおこなった。ドラえもんが登場する寸劇を利用して、地震発生のメカニズムを伝え、災害時にパニックにならないような情報をもってもらうことが目的である。学生たちが作った日本語の台本は、大学院生やアグネスさんの協力があって、無事に全編インドネシア語に翻訳された。出発前には、アグネスさんの指導の下、インドネシア語の特訓がおこなわれた。そのおかげもあり、防災教育活動は成功を収めた。アグネスさんは当然、この活動を「おもしろい！」と思ったわけである。そして、その薫陶を受けていたわたしもまた、スラウェシ島からジャワ島に進出することに決めたのだった。

京都大学東南アジア研究所での
インドネシア語特別講座の様子



アグネスさんが翻訳協力をした
インドネシアでの防災教育実演



アグネスさんが開設した
子どものための図書館。
南スラウェシ州タナバンカ村

20年ぶりの京都大学での再会。
右から2人目がアグネスさん

日本人の側の意識変化

さて現在、京都ではアグネスさんによる特別インドネシア語講座が開かれている。KIDSのメンバーの他、京大の学生や職員もまた、この非公式のクラスを受講している。アグネスさんによれば、二〇年前に比べると、京都の町ははるかにインターナショナルになったとのこと。以前は、アグネスさんと英語で話そうとする人はたくさんいたが、インドネシア語で話しかけられることはほとんどなかったという。それが今は、外国人だからと特別扱いするのではなく、まず日本語で話しかけられるようになったことに驚いたという。外国人と日本人という区別が特別なものではなくなったのではないかと、アグネスさんは感じている。二〇年ぶりの京都でえた日本人との新しいつきあい方の感覚を胸にして、これからの一年を、アグネスさんはどんなふうに暮らしていくのだろうか。今回の滞在でえた新しい経験を、しっかりとインドネシアに持って帰ることが自分の役目だと、アグネスさんは考えている。インドネシア人や日本人というくくりを越えて、どこにいてもまずは「おもしろい！」と思い、軽やかにステップを踏んでいくであろう。そういう姿を調査観察してみたい。

地球を集める

アフリカン・ビーズの展示に込められたもの

池谷 和信
（いけや かずのぶ）
本館民族社会研究部

アフリカ展示場の一角

みんぱくのアフリカ展示場の一角にビーズのコーナーがある。縦三メートル、横二メートルたらずの空間ではあるけれども、さまざまな素材からなるビーズが飾られている。ダチョウの卵殻片からなる首飾りや腰飾り、ガラスビーズでおおわれた肩掛けや男性用背広、マネキン人形につけられた鉄ビーズ製の首飾りや足飾りのかずかず。これらは、二〇〇〇年にあらたに加えられた部分であり、わたしが現地で収集してきたものでもある。

五〇日間の収集のはじまり

みんぱくに赴任してわずか半年後のある日、アフリカ展示担当の和田正平部長に呼ばれて、「みんぱくには、南部アフリカの物がほとんどないので収集の希望をしてみろ」といわれた。当時のわたしは、資料収集とはどういうものか、何を集めたらよいのか皆目、検討もつかなかった。

それまでわたしは、南部アフリカの先住民サン（ブッシュマン）の研究を中心にすすめていたので、長期間の調査を経験していたサン、現地を訪問して関心のあったヒンバ、そしてズールーやコーサの人びとの文化にかかわる物を対象に収集しようという案はできた。しかし、テーマが定まらないので、何を中心に集めたらよいのかわからなかった。

結局、一九九六年一〇月、南アフリカ共和国のケープタウンに着いたわたしは、まずは博物館や美術館を一〇ヵ所以上まわってどんな物があるのかを確かめ、三〇冊ほどの図録を集めた。次に、コレクター（収集家）が出入りする土産物屋に通い、どこで何が入手できるのか、いくらぐらいするかなど聞いてまわることで、物の情報や入手方法を把握できた。

その結果、当初予定していた地域の文化を紹介するうえで、ビーズが格好のテーマになると考えた。ケープタウンの店ではコーサのコレクション、ダーバンの店ではズールーの肩掛けや結婚式の衣装となるビーズなどを入手した。しかし、それらの多くは店の人が直接集めているとは限らないので、物にかかわる正確な情報を聞くことはできない。情報を収集するためには、現地をまわるしかなかった。

通訳を介しての駆け引き

わたしは、最寄りの空港までは飛行機、そこから現地にはレンタカーというかたちで、南アフリカやナミビアなどの五ヵ国を広くまわった。しかし、期待したとおりに現地でビーズ細工を収集できたのは、ナミビア北部に暮らすヒンバの人びとの物以外にはあまりなかった。とくに南アフリカ国内では、当時すでに使われなくなっていたのである。

さて、ヒンバの人びとは、男女とも現在でも上半身は裸でいることが多く、「裸族」としてよく知られていた。小学校に通っている子供もいるが、まわりの人のように洋服を着ることはない。わたしは、ヒンバの土地に行き、現地の事情に詳しく英語のできる通訳兼助手を捜した。ヒンバの土地と隣接して住むオバンボの農民の男性が見つかり、彼に事情を説明して、ヒンバの暮らす村や彼らの集まる場所をまわって、身につけているものを購入できないかと尋ねた。

ヒンバは、相手を見て値段を決めてくる。彼らに予想外に高い価格をふきかけられたり、断られたりすることも多かった。しかし馴れない駆け引きを続けたかいもあり、ある場所にやって来たヒンバから、幸運にもヒンバの女性の装身具を購入できた。首飾りは、長距離交易によって入手した白い巻き貝がついているので、既婚を示すものだ。足首の飾りは、民族のアイデンティティを示すものだ。足首の装身具を売ってくれた女性がその場所に布をまいていたのを見て痛々しく感じたことを、わたしは今でも覚えている。

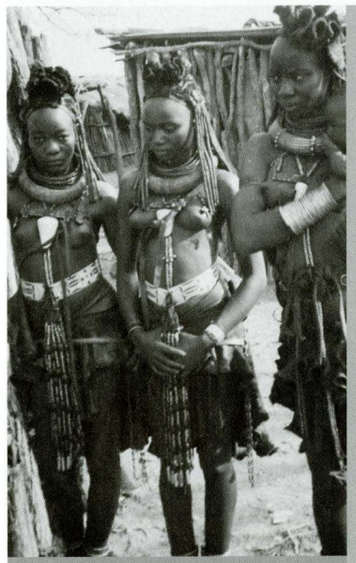
結局、現地では都市の土産物屋にはない逸品も入手できたが、土産物屋の方が安いということもあったし、現地ではどうしても売ってもらえなかったのに、土産物屋には並んでいたということもあった。

初めての展示で民族文化を表現

当時、みんぱくではあらたに収集した物をいちはやく公開するために、「新着資料展示」のコーナーがあった。当然、わたしは、翌年の一九九七年にアフリカ南部の多様なビーズの世界をテーマにした小さな展示を企画した。しかし、限られた展示の空間で何点くらい物を選んだらいいのか、検討がつかない。物みずからの主張に耳を傾け、きらりと光る一品、ビーズの多様性を表現してくれる物を選択しなくてはならない。幸い、館内にはビーズづくりを紹介する映像があったので、展示場でその様子も同時に見せることができた。

その後のわたしは、各地の博物館や美術館を訪れる際に、ビーズが使われた展示品が気になってしょうがなかった。ニューヨークのメトロポリタン美術館では、ヨーロッパ産のガラスビーズの最大の消費地がアフリカの南部地域であるということを知り、感激したものである。二〇〇一年には、館内の企画の一環として『世界のビーズ』と題する小冊子を刊行させていただいた。この本は、アフリカ南部のビーズ細工を見るまなざしを世界各地のビーズに展開したものである。

わたしは、みんぱくに赴任するまではビーズとはまったく縁がなかった。それが最近ではビーズばかりに目がいきすぎて、それ以外に収集した物も数百点あるのに、それらを収蔵庫のなかで眠らせてしまったままだ。近い将来、それらを公開できないかとひそかに考えている。


全体に装身具を身につけるヒンバ。鉄製ビーズからなるものが多く、総重量は5キログラムをこえる

小学校で授業をうけるヒンバの女の子

館内での新着展示の準備

南アフリカのダーバンでのズールーによるビーズ細工の販売

生きもの博物誌
【ニホンザル／日本】

サルに小馬鹿にされる日本人

伊澤 紘生
（いざわ こうせい）
帝京科学大学教授

サルとヒトとの共存

わたしたちの祖先、縄文人が渡来したおよそ二万年前、日本列島にはすでにニホンザルが広域に分布していた。狩猟を生業のひとつとする縄文人は、サルの肉を食用にし、頭や内臓や毛皮は薬用や衣料として利用していたと考えられる。そうしたつきあいのなかでアニミズム的一体感も醸成されていっただろう。また、化石からはサルが今より大柄であり、遺骨からは縄文人がわたしたちより小柄であったことからすれば、とくに交尾期の威風堂々たるオスザルは、子グマほどの大きさに映っていたに違いない。

その後三〇〇〇年ほどむかしから、弥生人が朝鮮半島経由で渡来し始める。彼らは定住する稲作農耕民である。森が切り払われ、開墾される。近隣の森は農用林、いわゆる里山へと変化していく。サルはそこでは農作物を荒らす害獣と認識されていたはずだ。一方で、人に近い動物であり、その賢さから、土着の信仰のなかにも組み込まれていった。

やがて縄文人と弥生人の混血化が進み、人口が急増し、稲作を中心とする日本国家の成立にいたる。それ以降、サルは害獣および狩猟動物として、里山を中心に日本人と攻防を繰り広げながら、両者は基本的には奥山と里とに棲みわけ、ともに生きてきた。

減少から回復へ、奥山から里へ

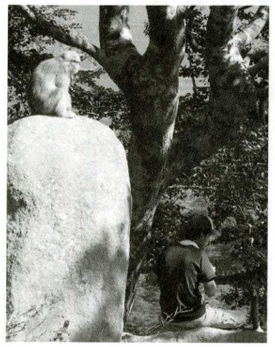
長く続いたこのような共存の状態は、近代に入って劇的に変化する。すなわち、明治中期以降戦前までは、銃器の発達や狩猟技術の向上によって、とくに積雪地域のサルは大量に撃たれ、東北から北陸地方にかけての多くの地域で絶滅していく。しかし戦後繰り広げられた国有林の大規模伐採と奥山の開発は、天然林を撹乱し、それまでより多様で多量の食物をサルに供給することになる。サルの数は回復する。同時に、伐採や開発に伴う縦横無尽の道路建設によって、サルの移動は驚くほど容易になった。

その後に、農業の機械化に続く里の過疎化や里山の消滅といった今日の時代が来る。里山という、人とサルの緩衝地帯（かんしょうちたい）はなくなり、里の防御力は著しく低下する。サルは奥山と里とを道路を伝って自由に往き来し始める。しかも、農作物は奥山の食物のように年変動がない。それによってサルの数は爆発的に増えた。

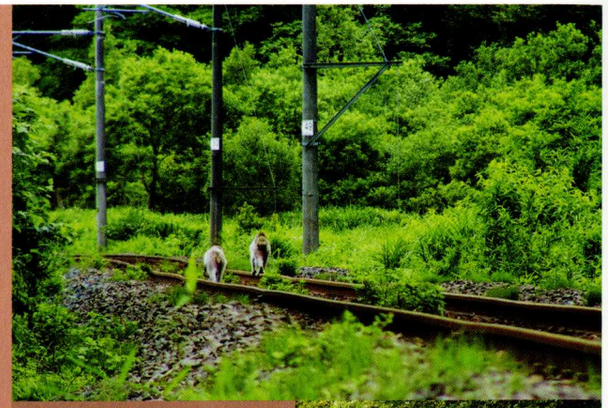
そして現在、もう奥山に戻ろうとするサルはどこにもいない。里に定着し、人を小馬鹿にし、さらに市街地への進出を強力に押し進めている。

食糧や薬用として、ときに神や神の使いとして、日本人の経済生活や精神生活のなかにしっかりと根付いていた「文化遺産・日本猿」像は、今や風前の灯である。同時に、戦後まもなく日本の知識界に華麗にデビューした「ニホンザル学」も、サルの圧倒的なパワーの前ではすっかり色褪せ、ほとんどなす術を失っている。

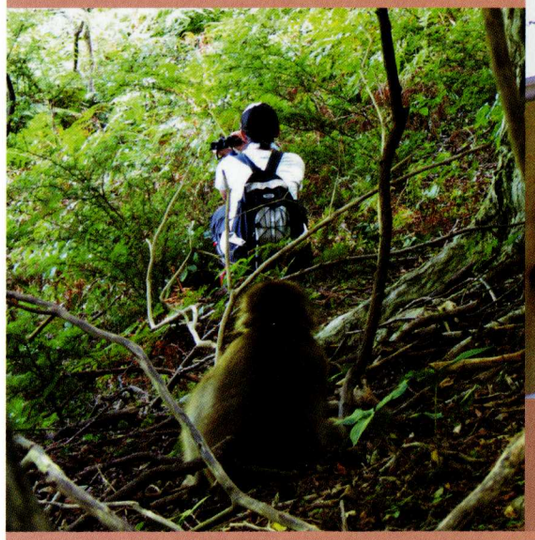
日本人は将来、ニホンザルをどう認識するようになるのだろうか。



サルの手鏡？



サルは行く、どこまでも。
道路を伝い、線路を伝って



ニホンザルの「ヒト学」？

ニホンザル（学名：*M acaca fuscata*）

オナガザル科。北海道と沖縄を除いて、北は青森県下北半島から南は鹿児島県屋久島まで、日本列島の広域におよそ20万頭が生息する。生息環境は、植生から見れば、より東の落葉樹林帯から西の照葉樹林帯、南の屋久島低地の亜熱帯要素が混ざる森林までを含み、それを反映して食物はじつに多様である。化石の証拠等からは、45万年ほどむかしに南方より朝鮮半島経由で渡来したと考えられている。

都市の「地層」を読む

木村 周平（きむら しゅうへい）
東京大学大学院総合文化研究科

過去に覆われた街イスタンブル

都市の魅力はそのダイナミズムにある。新しいものが次々と生み出され、それがすでに存在していたものと混じり合い、独特の風貌を作り出す。一五〇〇年を超える歴史をもつ街イスタンブルは、アジアとヨーロッパの中間地点に位置するというユニークさと、オスマン帝国時代の美しいモスクで知られるが、その一方、トルコ最大の都市として一〇〇〇万人を超える人口をもち、巨大なショッピングモールや高層の集合住宅を数多く抱える大都市でもある。こうした「古さ」と「新しさ」の混淆（こんこう）こそが、二〇〇六年にノーベル文学賞を獲得したオルハン・パムクらの芸術家を惹きつけてやまない魅力なのではないだろうか。

とりわけ現在の都市に顔をのぞかせる古いものに注目してみよう。イスタンブルに積み重なった「地層」を垣間見るために、街を歩きながら、一九世紀のフランス人作家ピエール・ロティの儚（はかな）い恋物語『アジヤデ』を読んでみる。そこには今からおよそ一五〇年前の騒々しさ、エキゾチズム、かつての繁栄の記憶が瑞々しく描かれている。オスマン帝国の繁栄期は、ロティがいた時代よりもさらに三〇〇年遡らなければならず、一九世紀末、イスタンブルはすでに「過去」に覆われた街であったのだ。

火事との戦い

かつての中心街は今、鉄筋コンクリートの建物群にびっしりと覆いつくされている。街のなかに、ちらほらと古い木造建築が残っているのが見えるだろう。ロティの文章を追えば、この地区は細く入り組んだ路地と、出窓の張り出した木造の家々に満ちている。当時は木造住宅がそこを占めていたのだ。さらに『アジヤデ』では、地区のひとつが大火で消失してしまう姿も描かれているが、大火事は現在のイスタンブルからはほとんど想像できない。ロティと我々のあいだのどこかで、人びとの暮らしの場は二階建ての木造建築から鉄筋高層アパートへと移行し、それとともに、火事との長い戦いも次第に過去のものになったからである。

歴史をたどれば、じつはこの火事との戦いを開始させたのは地震であった。一五〇九年、オスマン帝国下のイスタンブルを「クチュック・クヤーメット」とよばれる大地震が襲う。直訳すれば「小さな（宗教的な意味での）世界の終焉」という地震の名前からも、衝撃の大きさがしのばれる。地震の揺れによる被害を抑えるための木造建築が別の災害を招いてしまうことになったのは皮肉なことである。

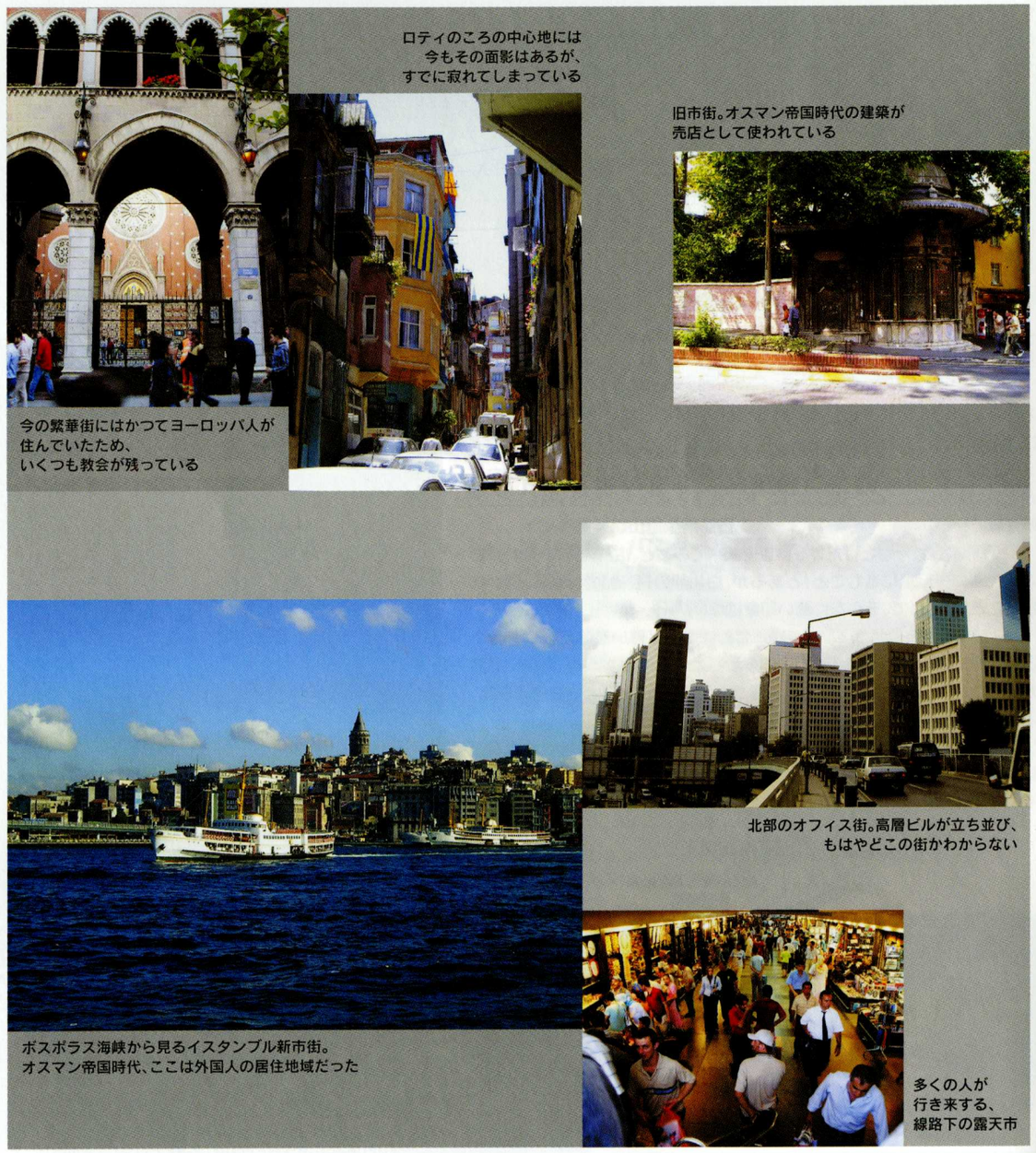
これに対しイスタンブルではふたつのことがおこなわれた。ひとつは、一七一四年にイェニチェリとよばれる軍のなかに創設された消防隊である。当時の消防とはポンプ（トゥルンバ）で水をかけて火を消すもので、消防はポンプ屋（トゥルンバジュ）とよばれた。そしてこのトゥルンバジュは一八二六年のイェニチェリ廃止ののち、各地区の住人が担うことになるが、これは日本でいうなら町火消しであろう。彼らは荒くれ者が多く、統制がとれなかったため大火に対して役に立たず、一八六〇年には再び行政の下に置かれた、という話もある。

もうひとつは都市計画である。すでに一六世紀のスルタンたちは、火災の延焼を防ぐため、家の庇（ひさし）を小さくしたり、消火槽を設置したりするよう指示していた。一九世紀なかごろからは都市の治安維持と防災対策のために、道路拡張や広場の建設などをおこない、また火事を出した地域では木造建築を禁止したりもした。さらに一九五〇年代の大規模な都市改造によって、街をとり囲んでいたビザンツ帝国時代の石壁の一部がとり壊され、新しい道路と線路が敷設された。こうして今のイスタンブルの骨組みは形作られてきた。

人口増と高層化の二〇世紀

第二次世界大戦後には急激な人口増がこの街を襲った。「イスタンブルの土地は黄金だ」といわれ、一九二三年の共和国成立時には一〇〇万人に満たなかった人口は、それから八〇年ほどで一〇〇〇万人を超えることになる。そうした過程で、木造に代わって、手間がかからず、また建物の高層化が可能なコンクリートという材料が大々的に導入される。増え続ける住宅の需要によって、部分的には計画的に、しかし大部分は無秩序に地面を建物で覆い、またその範囲も次第に広がっていった。この変化は火事の危険を減らしたものの、五〇〇年前同様、揺れによる地震のリスクを高めた。イスタンブル市では最近、消防から独立して災害に対応する課が設置されるに至っている。

都市にはあちらこちらに亀裂が入り、古い「地層」が顔をのぞかせている。それにふれ、そこから社会を見直すことも、都市におけるフィールドワークのひとつの醍醐味であろう。



ロティのころの中心地には今もその面影はあるが、すでに寂れてしまっている

旧市街。オスマン帝国時代の建築が売店として使われている

今の繁華街にはかつてヨーロッパ人が住んでいたため、いくつも教会が残っている

北部のオフィス街。高層ビルが立ち並び、もはやどこの街かわからない

ボスポラス海峡から見るイスタンブル新市街。オスマン帝国時代、ここは外国人の居住地域だった

多くの人が行き来する、線路下の露天市

2006年度年末年始展示イベント

「いのしし」

机（パプアニューギニア）

仮面（ネパール王国）

会期：2007年1月30日（火）まで
場所：本館1階　エントランスホール（無料ゾーン）

今年は十二支のアンカーをつとめるイノシシの年。とはいえ、干支にイノシシは日本だけ。中国や韓国をはじめ、東アジアの諸地域ではブタ年です。害獣として敬遠される反面、どことなくユーモラスな風貌から憎みきれないイノシシ。タブーの動物と嫌われることもあれば、財産の象徴として崇められることもあるブタ。イノシシとブタに色々な意味づけを与えてきたのは、人間に身近な存在だからこそ。新春恒例の今年の干支展では、人間が自分たちの姿を重ね合わせてきたイノシシやブタが皆さんをお迎えします。

絵馬（日本）

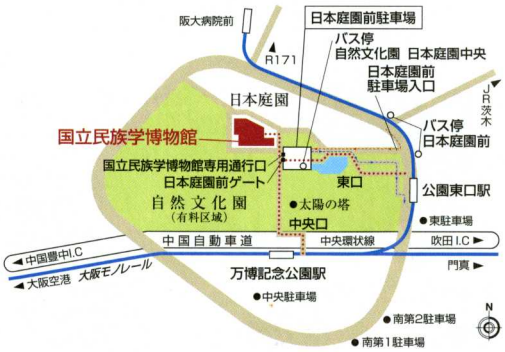
編集後記

今年はイノシシ年。ただ、残念なことに、日本ではイノシシのイメージはあまりいいとはいえない。いのしし武者ということばがあるように、勢いはいいが思慮に欠けるとされる。こうした、日本人のイノシシに対するイメージの形成に一役買ってきたのは、猪突猛進ということばではなかったかと思われる。これは、一般的には、あとさきを考えずに突っ込むこと、と解されている。

だが、猪突ということばだけを辞書で調べてみると、広辞苑ではやはり「むこう見ずに一直線に進むこと」とあるが、白川静の『字通』では単に「勢いの鋭いこと」とあって、そんなに悪い印象はない。

だとすると、猪突猛進というのも、もとはさほど悪い意味ではなかったというのもありえない話ではない。あえて大胆に推理すると、猪突に猛進がくっついて、その猛進がいつしか盲進と混同されて、あとさき考えずに、となったのかもしれない。

いずれにせよ、前回1995年のイノシシ年は、日本では阪神淡路大震災に地下鉄サリン事件と、散々な年であった。今年は、どうなるのだろうか。平和で幸福な1年であってほしいと願わずにはいられない。　（川口幸也）



月刊みんぱく

次号予告／2月号特集
災害

2007年1月号　第31巻第1号通巻第352号　2007年1月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151
発行人　朝倉敏夫
編集委員　池谷和信（編集長）　樫永真佐夫　川口幸也　庄司博史　山中由里子
協力　財団法人 千里文化財団
制作　株式会社博報堂
製版・印刷　アサヒ精版印刷株式会社

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます

〈訂正とお詫び〉　本誌12月号巻末索引13頁に誤りがありました。「東アジア（朝鮮半島）」に入っている「9303千島アイヌの腰帯」「9306アイヌの煙草入れ」「9307アイヌのアットゥシ・アミブ」「8602アイヌの木盆」「9411アイヌの首飾り」は、正しくは14～15頁の「東アジア（アイヌ）」のなかに含まれるものです。読者の皆様にお詫び申し上げます。

交通案内

■大阪・千里万博記念公園内　●大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。　●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分（茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。　●自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。　●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。